一般教育総合コース

社会と学問

昭和51年度

お茶の水女子大学
平成
28.3.10
受贈
附属図書館

お茶の水女子大学

講　義　日　程

（講義日時＝土曜日第三・第四時限 10：20～12：00）
（合併1教室）

月	日	分野	担当講師	月	日	分野	担当講師
4	17	序説	中川教授	9	18	社会	内藤助教授
	24	社会	宮島助教授		25	〃	〃
5	1	〃	〃	10	16	自然	竹内助教授
	8	人文	本田助教授		23	〃	〃
	15	〃	〃		30	人文	小池助教授
	22	社会	鶴見教授（上智大学）	11	6	〃	〃
	29	〃	〃		20	自然	亀井講師
6	5	自然	細矢助教授		27	〃	〃
	12	〃	〃	12	4	社会	吉田教授
	19	〃	清水助教授		11	〃	〃
	26	〃	〃		18	人文	佐藤助教授
7	3	人文	青木教授	1	22	〃	〃
	10		セミナー	2	5		セミナー
9	11	人文	青木教授		12		試験

目　次

「社会と学問」はじめに …… 中川　信　1頁
第一講　学問の専門化と知識人 …… 宮島　喬　2頁
第二講　子どもへの視線 …… 本田和子　3頁
第三講　日本の土着的思想の系譜 …… 鶴見和子　4頁
第四講　化学はなぜきらわれるか …… 細矢治夫　5頁
第五講　生物学と社会 …… 清水　碩　6頁
第六講　歴史と歴史学 …… 青木和夫　7頁
第七講　地域開発の思想 …… 内藤博夫　8頁
第八講　数学と社会とのかかわり …… 竹内順治　9頁
第九講　服飾美学の研究対象としての江戸時代…… 小池三枝　10頁
第十講　ニュートンのりんごの木…… 亀井　理　11頁
第十一講　教育学と社会の関連 …… 吉田　昇　12頁
第十二講　中国の教育革命 …… 佐藤　保　13頁

総　合　コ　ー　ス

「社会と学問」　本田・青木・小池・佐藤（人文分野）
宮島・鶴見・内藤・吉田（社会〃）
細矢・清水・竹内・亀井（自然〃）

一般教育関係科目の各分野にわたる共通な一つの主題について，総合的に学ぶものである。

主として二年生対象

履修単位数：4単位　二年度までの計8単位が一般教育科目の単位として数えられる。
但し，各分野で最低8単位修得すべき単位には含まれない。

セミナー：総合コースの成果をあげるため，前・後期，各1～2回程度セミナーを行なう。

試験方法：学年度末に試験が行われるが，その際人文・社会・自然の各担当講師から試験問題が示され，学生は三分野の出題から一題ずつ計三題にかならず解答しなければならない。

は　じ　め　に

中　川　　信

一人の教官が年間を通して講義を担当する普通の授業と異って，この「総合コース」はある特定のテーマのもとに専門を異にする多くの教官が集まり，それぞれの立場から問題を論じ，また学生諸君と共に考えることを目指した独特の形態を取っている。学生諸君はこの連続講義に出席することで，全体として首尾一貫し，完結した知識が与えられるといった受身の態度にならぬよう心掛けてもらいたい。それぞれの講義は一つのテーマをめぐる多様な物の見方の紹介であり，問題の提起でしかないのである。これらの素材をもとに諸君が比較・検討し，広い視野に立ち，各人が一人一人それぞれ豊かな全体像を築きあげるよう努めなければならない。問題を充分に理解し，総合的にアプローチすることこそ本コースが出席する諸君に望んでいることである。そして前・後期それぞれ一回ずつ予定されているセミナーが，本年度の講義に参加する教官・学生全員による活発な対話の場となるよう開講に先立って期待しよう。

第一講　学問の専門化と知識人

宮島　　喬

「自分で革のめかくしをつけ，自分の魂が救われるかどうかはある写本のある箇所を正しく判読しうるかどうかにかかっている，とまで思いこむことができないような人は，学問にはそもそも縁なき衆生である。」このマックス・ヴェーバーの峻烈な言葉は，学問することのきびしさをよく教えている。学問がたんなるディレッタントの楽しみでない以上，またあらたな知識や法則の絶えざる探求でなければならない以上，それは深い専門性を目ざさなければならない。

しかし，現代科学においては，他の専門領域の動きに通じることの不可能なほど極端な専門の細分化が進行する一方，科学知識がしばしば研究者の意図や良心のコントロールをはなれて社会的に機能化していくという事態が生じている。「精神なき専門人」とか「専門バカ」という批判をもって学問する者のモラルや姿勢が問われているゆえんである。しかも「知識人」というカテゴリーが，アカデミズム研究者ばかりでなく，技術者，専門職，テクノクラート，学生などをも含むようになっている今日，専門的知性の生みだす問題はきわめて多様化しているといえる。講義では，１９世紀から現代にかけての学問の状況と知識人の類型の変遷をたどりつつ，専門化の過程にある現代の学問と社会との正しい結びつきがどうあるべきかを考えてみたい。

参　考　文　献

○ヴェーバー『職業としての学問』（岩波文庫）

○コーザー『知識人と社会』（培風館）

○サルトル『知識人の擁護』（人文書院）

○クーン『科学革命の構造』（みすず書房）

第二講　子どもへの視線

本　田　和　子

"稚児は怪しき弓，しもとだちたる物など捧げて遊びたるいと美し，車など止めて，抱き入れてみまほしくこそあれ"

手作りの玩具で打ち興じる子どもの姿を，"枕草子"の作者は，"いと美し"ととらえ，"抱き入れてみまほし"と言っている。ところで，近代の科学は，このような子どもの行為に関して，単に"美し"と嘆賞するだけではなく，発達的な経過を説明するであろう。

子どもが科学の対象とされ，科学的な眼で注視されるようになったのは，１９世紀以降のことである。それは，子どもに向けられていた芸術の眼が，科学のそれに席をゆずったかに見える出来事でもあった。この交替は何を意味し，何をもたらしたであろうか。

子どもに注がれる視線を手がかりとして，現代社会と学問のかゝわりの一端を考えてみたい。

参　考　書

(1)　宗像誠也他『日本の幼児』　明治図書　１９６８

(2)　D.B.ハリス 津守真訳『児童発達教育学』光生館　昭４６

(3)　本田和子『児童文化』　光生館　昭４８

(4)　上野　瞭『現代の児童文学』中公新書　昭４７

第三講　日本の土着的思想の系譜

―― 柳田国男と南方熊楠をめぐって ――

鶴　見　和　子

参　考　文　献

鶴見和子・市井三郎編　『思想の冒険 ―― 社会と変化の新しいパラダイム ―― 』（筑摩書房）

鶴見和子編　『好奇心と日本人』（講談社現代新書）

鶴見和子編　『土着文化と外来文化』（講談社）

『近代日本思想大系・14』（筑摩書房）

第四講　化学はなぜきらわれるか

細　矢　治　夫

化学に対する人気が次第になくなって行くという傾向は，全国の大学の入学試験における化学科の競争率の低下に如実に現れている。その最大の原因は公害問題と石油等の化石資源の涸渇にあるであろう。もう一つ見逃すことのできない問題は，化学者が他の学問分野や社会一般の人との積極的な対話を怠って来たことにある。それは高校の化学の教科書にも反映されているし，青少年向けの化学の啓蒙書がほとんど見られないことを考えても明らかであろう。

しかし現実には自然科学の中で化学はそれほど生彩のない学問分野でもないし，社会全体の中で公害の元凶ときめつけられて見動きのとれなくなった状態でもない。この辺の事情を具体的な例をもとに考えてみたい。

第五講　生物学と社会

清水　碩

生物学は農業，医学の分野を通して，遠い昔から人々の生活と深いかかわり合いをもって来た。そしてごく最近まで生物学の進歩は人間社会の進歩と無条件に結びつけられて来た。しかし近年になって，この両者の間にただバラ色の関係だけを見ることは許されなくなり，近い将来に好転するきざしは少くない。こうした生物学と社会との関係は，生物学の本質に根ざすものであろうか？またこの現状を生物学は予想することはできなかったのであろうか？　生物学の発展の歴史をふり返りながら，この問題を考察する。

参　考　書

○宮脇昭著　「植物と人間」（日本出版協会）

○ベイカー著　「植物と文明」坂本寧男・福田一郎訳（東大出版会）

○カーソン著　「沈黙の春」青樹築一訳（新潮社）

第六講　歴史と歴史学

青木和夫

——フランスの田舎では，村の辻に等身大の聖母像が立っているのを見かけることがある。或る早朝，みすぼらしい身なりの２人が聖母像の前を通りかかった。前夜は宿屋にも泊れなかったらしい，軽業師とその弟子とである。気づいた軽業師は立ちどまり，像に向かって十字を切りながらつぶやいた。〝マリアさま。私は芸が拙なくて，昨日は弟子にもろくに食べさせてやれませんでした。今朝は，マリアさまにさしあげられるものもございません。どうぞ，私どもの軽業だけでも御覧下さいますように。〟彼は弟子をうながして，誰もいない掃き清められた辻の広場で，最も得意とする出しものを弟子と共に演じた。うやうやしく礼をして彼らが立ち去ったあとの朝の光の中に，聖母像の眼と頬には涙が光っていた。——

子どものころに此の物語りを読んで以来，作者のアナトォル・フランスがバルナシアンから社会主義者に変っていったということを聞いた後も，私は此の小品を読みなおしていない。しかし心の底には沈んでいるらしくて，「社会と学問」という課題を与えられたとき，私は久しぶりに物語りの筋書を想起した。

学問と芸術とは異なる。ただ，好きこのんで身を投じたという点では変らない。学者は本来，乞食坊主であるべきだろう。しかし問題が「社会と学問」として与えられると，回答は心情の告白では済まない。考えなおさなければならぬ。

参　考　書

○マックス・ウェーバー「職業としての学問」

○三木　清「歴史哲学」

第七講　地域開発の思想

内　藤　博　夫

地域開発の本来の意味は地域資源の有効利用によって住民の生活水準の向上をはかることである。しかし開発が利潤の増大を主要な契機として遂行される段階になると，それは社会的損失をもたらす要因ともなる。最近では地域開発という言葉は公害と結びつけて理解される例が多くなった。その背景には地域開発の変質の問題があることは明らかである。この講義では地域開発の歴史を，それを支えた思想的基盤と関連させてたどってみることにしたい。

地域開発が及ぼす影響は社会経済面にとどまらずに，しばしば自然環境の破壊をもたらしている。近年の自然破壊の大規模化と広域化からいって在来の自然保護運動だけではそれを防止することは不可能であろう。このように自然環境だけをとり出してみても，それを保全するためには新しい状況に見合った思想と理論の発展が必要である。時間が許せば，狭義の自然保護運動から自然破壊に抵抗する住民運動に至る運動の発展についても考察してみたい。

参　考　文　献

ピエール・ジョルジュ（寿里　茂訳）『環境破壊』
（文庫クセジュ，1972年）
宮本憲一『地域開発はこれでよいか』（岩波新書，1973年）
日本科学者会議編『公害と人間社会』
（講座「現代人の科学8」，大月書店，1975年）
K.W. カップ（柴田徳衛・鈴木正俊訳）『環境破壊と社会的費用』
（岩波書店，1975年）
高校地理教育談話会編『開発と地域の変貌 ── 鹿島臨海工業地帯 ── 』
（大明堂，1975年）

第八講　数学と社会のかかわり

竹　内　順　治

数学はそれを研究する者にとって，没社会的な性格の強い学問といえるであろう。数学を研究するとき，極度の精神の緊張・集中を不可欠とするからである。事実数学ほど古来から，あまたの変人・奇人を生み出した学問は他にないかも知れない。このような特異な個性の代表格として，多変数関数論において世界的業績を樹立された岡　潔先生が挙げられる。数多くの彼の随筆集あるいは対談集を通して，数学者と社会のかかわりあいを，まずあとづけてみることにしよう。

数学は実利を超越して，しばしば芸術にたとえられる美的世界を追究する一方，物理学や社会からの要請を受けて拡大発展してきたものである。また昨今は情報化時代と呼称されるほどに電子計算機が多方面に活躍するようになった。最近，高校入試において「偏差値」が猛威を振っている状況が指摘されているが，大学入試においても好ましからざる現象が生じている。このようなコンピューターの功罪についても考察することによって，転換期にある本学のこれからの針路について，学生諸君からの提言を聞かせていただきたいと思っている。

参　考　文　献

○「岡　潔集　第1巻～第5巻」　学習研究社　昭44年
○赤　摂也ほか編　「数学のすすめ」　筑摩書房　昭44年
（このうちとくに清水達雄氏執筆分）
○朝日新聞社編　「いま学校で　4」　昭51年

第九講　服飾美学の研究対象としての江戸時代

小　池　三　枝

江戸時代の服飾文様の中には，町人の日常生活の中でのさまざまな表現と共通する発想をもつものがある。たとえば，語呂合せ・もじり・言いかえ・謎などの「言葉の遊び」と同じ方法で考案された文様が数多くあり，そのうちのいくつかはかなり広く流行した。

服飾美学の問題としてこのような文様を扱う場合には，その主題を調べたり，それが作られた意図や当時の人々の生活の中での思考方法の特色を考えることが必要である。

しかし，一体このようなことを考えることは，いかなる意味があるのだろうか。またそれが学問として成り立ちうるのだろうか。更には現代の問題たりうるのだろうか。これらの点を考えていきたい。

第十講　ニュートンのりんごの木

亀　井　　理

数学の言葉で書かれ，一定の範囲内ではけっして例外がなく，実験を通じてのみ検証できる——このような特質をもった自然の規則性は，17世紀以来，自然法則とよばれるようになった。

自然には法則が存在するという信念こそ近代物理の核心にほかならない。この信念は急速に或る階層の人々をとらえたので，科学革命ともいわれるが，その社会とのかかわりをニュートンを通して概観する。

a）まずニュートン（1643－1727）の生涯を英国の社会においてみよう。これは，ほぼ二百年にわたる支配層の大交代期の後半に重なっている。変革のピークであるイギリス革命の時代は彼の幼・少年期にあたり，また，新天文学と占星術の権威が逆転した時期でもあった。錬金術のほうは健在でニュートンも研究にとりくんだらしい。

b）科学革命をひきだしたものとして，社会的な基盤を中心に，世界像の転換・宗教改革の影響などの視点をとりあげる。

ニュートンの主著プリンキピア（1687）の社会的経済的な根という論文が，半世紀ちかく昔に書かれているが，近代物理は資本制とともに生れたという言葉に，実質的な内容が与えられるのはこれからである。

c）参考書としては，当時の文章の引用を柱にくみたてた伝記と，この時代を扱った読みごたえのある論文集をひとつ：

ヴァヴィロフ「アイザク・ニュートン」（三田訳　東京図書）

ツィルゼル「科学と社会」（青木訳　みすず書房）

なお，プリンキピアの全訳は中公版「世界の名著」第26巻にあるが，古典のつねとして通読むきではない。編者解説のほうがはるかに面白い。

第十一講　教育学と社会の関連

吉田　昇

教育学は教育についての思弁の体系化から発足した。その教育学に近代社会の進展とともに実証性が求められてくる。とくに，心理学と社会諸科学の影響は著しかった。教育についての実証的研究が進展するにつれて，教育学は多くの専門領域に分化したものになってきている。そのことは，教育学を社会に役立つものにしていく点で大きな前進と考えられる。

しかし，現在の教育学にみられる分化の傾向をとくに社会との関連の上で反省する動きも出てきている。実証的研究に基く分化が進むなかで，人間としての総体の発達をめざす実践である教育との関連が見失われ，行政や経営の視点からの部分的な実用性だけが肥大していくのではないかという危懼が感じられているのである。

教育学を人間の発達という総体的課題にかかわる学問としてとらえようとすると，その統合の視点をどこに置くかが問題となってくる。その場合の教育の目的となる価値観を実証的分析によって見出されるその時代の社会の通念だけに固定してしまっては教育学は社会の進展に寄与することはできなくなってしまう。社会の体制から影響を受けながらも，さらに現状を超えて社会を発展させていく分析・総合の学問としての教育学の再興が現代の課題として求められているのである。

参　考　文　献

教育学全集（増補版）Ⅰ　「教育学の理論」　昭和５０年　小学館
海後宗臣　「教育学五十年」　昭和４６年　評論社
村井　実編　「原典による教育学の歩み」　昭和４９年　講談社

第十二講　中国の教育革命

佐藤　保

文化大革命の中で最も基本的な問題の一つとして提起され，その後，精力的に推進されている中国の教育革命の内容を考察する。

学問と労働との直結を目的とする教育革命は，われわれに多くの重要な問題を投げかけているが，それを理解するためには，旧中国における伝統的な教育の概念 ── 例えば，儒家集団の教育観や科挙制度 ── また，旧中国から近代国家に脱皮しようと苦斗する過程で進められた，さまざまな教育改革の実態などを，概観する必要がある。

従って，以下の三項にわたって本考察は進められることになろうが，(1)(2)は，いわば序論的な性格をもつものである。

(1)　旧中国の教育 ── 科挙を中心として

(2)　辛亥革命前後から進められた教育改革の動き

(3)　文化大革命における教育革命

参　考　文　献

『科学と労働を結ぶ教育改革』　朝日新聞社編
（朝日市民教室＜日本と中国＞　６）　１９７２・３　朝日新聞社
『中国現代教育史』　斎藤秋男著　１９７３・１１　田畑書店
『中国社会主義教育の発展』　小林文男編　１９７５・２　アジア経済研究所

『科挙』　宮崎市定著（中公新書）　１９６３・５　中央公論社